繋がることから始まる イノベーション

松岡 大

イスラエルはおもしろい国である。人口890万人（2018年）。日本が2005年以降人口減少に転じたのに対して、先進的な国としては数少ない人口が増加する国だ。イスラエルと日本は地理的にある意味で似ているが、大きく異なるとも言える。いずれの国も4つに囲まれている。日本は4つの海（オホーツク海、太平洋、東シナ海、日本海）であるのに対して、イスラエルは4つの国（レバノン、シリア、ヨルダン、エジプト）である。この置かれている環境と人口の増減に関する議論は別の場で行っていただくこととして、論点を重要なキーワードへと繋げていきたい。

結論から申し上げますと、本会会長の挨拶にある「繋ぐ」がキーワードである。イスラエル人の知り合いは言う。イスラエルでは、間に二人入れば誰とでも繋がれる。それが例え有力な政治家であっても、いささか誇張されている気がしないではないが、イスラエル人のネットワークは非常に強力であることは間違いない。現代の日本人の場合、一般的に考えてみると難しい。

しかしながら、繋がりキーワードに過去に遡ってみると、弊社（TDK株式会社、以下、TDKと略す）創業の歴史と電気化学会の繋がりが見えてくる。電気化学会の初代会長を務められた東工大の加藤与五郎博士が、同大学の武井武博士と共に発明したフェライトは、TDKの原点である。初代社長の齋藤憲三は、まさに人の繋がりを通じて加藤博士と出会い、世界で初めてフェライトを工業化すべくTDKを立ち上げた。ここに至るに多くの人の繋がりがあったわけだが、重要なことは、フェライトの工業化に関係した多くの方々の強い想いであった。

翻ってみると、今の世の中はインターネット等のネットワーク社会となり、電子的技術によって人の繋がりが容易になった。スマホに代表されるネットワーク端末を用いれば、世界のどこにいても誰とでも瞬時に繋がるのが可能だ。この技術的進歩に電気化学が果たした役割の大きさは疑いの余地はなく、今後の期待値は益々大きくなることだろう。しかしながら、多くの人たちと容易に繋がることができるようになった一方で、個人的な感覚であるが、各々の繋がりやの強さに脆さが見え隠れする場合がある。

本会は、「魅力ある学会作り」をスローガンに「産学官連携の強化」と「人材育成と次世代継承の推進」を活動方針としている。これは誠に素晴らしい方針である。なぜならば、「産学官連携の強化」と「人材育成と次世代継承の推進」から生まれてくる大いなる可能性の一つは、イノベーションであるからだ。令和元年9月19日の国の未来投資会議において、Society 5.0の社会実装の重要性が確認された。将来をにらんだ足の長い研究開発投資が重要であることは当然として、資金面、人材面で豊富なりソースを有する既存企業によるスタートアップが期待され、新たな分野への投資が求められている。イスラエルでは多くのスタートアップが自らの夢を具現化すべく立ち上がり、強力なネットワークから拠出される資金が彼らを後押しする。日本も、本会をきっかけに「繋がり」、多くのイノベーションの起点となることを切に望む。

Dai Matsuoka
本会 2019, 2020 年度副会長
TDK 株式会社
執行役員